

## 「加計学園」閉会中審査

なかなか鋭い「松尾貴史 ちょっと違和感」（毎日新聞 7月15日夕刊）。大きな見出しには「恥の上塗り」だった自民党議員。紹介しておきたい。



安倍晋三総理大臣の腹心の友でゴルフ仲間、そして総理夫人のフェイスブックによれば「男たちの悪だくみ？」をする間柄の人物が理事長を務める学校法人「加計学園」の獣医学部新設をめぐる特別扱いに関して、衆参両院の閉会中審査が行われた。参考人として出席した前川喜平前文部科学事務次官の答弁が、あまりにも堂々としていて「この人が嘘をつく理由」というものをあれこれ想像してみたのだが、私の想像力が乏しいのか、一切思いつかない。対する、「圧力をかけた側」「行政をゆがめた」と指摘されている側のキーパーソンは逃げ、もちろん最も説明責任を果たさなければならない総理大臣は「外遊」を理由に欠席し、本稿執筆時点でいまだ、本人が努めると言っていた「丁寧な説明」は、しようという気配すら感じられない。質問に立った自民党の議員は、どう客観的に見ても前川氏の人格をおとしめることのみ躍起で、それは以前から菅義英官房長官が熱心だった「印象操作」の恥を上塗りするばかりだった。……

安倍内閣の支持率が、第2次内閣発足以来最低になったようで、各報道機関の調査で軒並み30%台に突入した。そろって不支持率は支持を上回って50%ほどとなり、この政権と総理大臣が信用できないということに多くの国民が気づいてきたのは喜ぶべきだけれども、秘密保護法やら戦争法（安保関連法制）やら共謀罪法（改正組織犯罪処罰法）やらを、多数の横暴によって、まともな説明もできずに乱暴で姑息で狡猾な手法を使って強行採決してきたこの国の傷を癒すには、気の遠くなる時間と代償を費やさなければならない。

即刻安倍内閣が総辞職しても、この負の遺産、恐怖の種を取り去る過程が待っているかと思うと、安倍氏の推し進めてきたことの罪深さは筆舌に尽くしがたい。もちろん、当人は辞意などかけらもち合わせていないようで、8月に内閣改造をして、問題山積の大臣を外して延命しようという「ご意向」らしい。このタイミングで入閣の要請を受けるのは誰なのか興味深い。人気回復のためにイメージアップを図って組閣するのだろうが、ここで入閣して自身の人気を下げるデメリットは大きいだろう。ここで引き受ける人は「大臣である」あるいは将来「大臣であった」ということが目的なのだろうなあ、とすら思う。もちろん、適材適所であればいいのだが、任命する側の政治姿勢があれば、まっとうな仕事もできないだろう。知名度や人気のある（であろう）人物の名前が取りざたされているが、自身のイメージを安倍氏と道連れにしようという人たちの顔ぶれが決まるのを怖いもの見たさで待つ。

（2017年7月22日）